

村民の記憶

—東海村、そのとき、あなたは—

episode 3

スポーツ・文化芸術が結ぶ村民の“わ”

東海村の誕生後、日本原子力研究所をはじめとした各事業所や日立製作所など近隣企業で働く人々が東海村に多く住み始め、団地が整備されていきました。そして、さまざまな経歴や考え方を持つ人々が、スポーツや文化祭などを通して仲良くなっていきました。

東海村文化祭の誕生と50年の歴史

昭和39年3月、現在の東海中学校に隣接していた村役場と東海中学校の一部が火事で焼失。その焼け残った校舎を中心に、毎年、文化の日（11月3日）から2・3日間は、現在の文化祭の前身である「趣味の集い」が開催されていました。玄関には菊花や盆栽などが、教室には習字や絵画、生花などが展示され、素朴さの中に作者の熱意を感じたのを覚えております。（茶道連盟会員）



昭和40年代末頃、西野いくさん（村婦人会の会長）がわが家を訪問された際、婦人会への入会を勧められました。その時に「何かやっているの?」と聞かれ、「こんなもの作っています」と作品を見せると「文化祭があるから出してみたら」と勧められ、初めて参加したのが東海中学校の会場でした。（技芸連盟会員）



▲文化祭の様子（東海中学校）

平成12年、東海村は「文化の薫り高いまちづくり」を掲げ、文化の振興に力を入れてきました。この頃、故山崎猛先生（茨城大学教授）などの協力もあり、全国規模の彫刻公募展も開催されました。文化祭に出品したのは退職してから。子どもから大人までが一堂に会して、展示をし、鑑賞に来る文化祭は、村民にとって貴重な機会だと感じました。（美術連盟会員）



東京ではディスコブームでジャズダンスも流行していましたが、東海村ではジャズダンスの発表が初めてということもあり、大変珍しがられて話題になりました。（ジャズダンス連盟会員）

東海村文化協会:

昭和52年東海村文化協会設立総会にて

「他市町村だろうが、他県の人だろうが、入りたいという人は全部入れて良い」と発言した人がいた。…その方は川崎村長だということが分かった。…「村内の新旧住民の深いミゾの融合に苦慮し、対策を考えていた」からの答えだったのだ。

（書道連盟会員）

（『東海村文化祭50回記念 東海村の文化を創り上げた人々』（2022）より加筆引用）

令和6年東海村文化祭ポスター▶



「やったん祭」



昭和58年11月23日、「やったん祭」が初開催されました。

中央公民館で活動していた高校生会や青年会、ボーイスカウト、ガールスカウト、東海ダンス研究会（TDK）は、お互いに顔見知り程度だったため、仲良くなるために青年会主催で、年に一度お祭りを一緒に行うことにしたのがきっかけです。最初の案は「東海村ごめんくだ祭」という名前でした。しかし、茨城高校の文化祭で「ごめんくだ祭」の名前がすでに使われていたので、レクリエーションで歌う「こんばんわ」の歌詞から“やったんさい”（やっってくださいの意）に名称を決定しました。

（元役場職員）

平成25年やったん祭看板▶



昭和40年～60年代の東海村の主な出来事

- 昭和49年 第29回国民体育大会「水と緑のまごころ国体」
(東海村はホッケー会場)
東海村弓道スポーツ少年団が結成される
- 昭和50年 旧清掃センターが完成
- 昭和51年 村民対象の原子力施設見学会が開催される
第1回茨城県ソフトボール大会が開催される
- 昭和52年 東海村文化協会が発足
村民会館(現・東海文化センター)が開館
- 昭和53年 東海南中学校が開校
原電・東海第二発電所の営業運転開始
- 昭和54年 第1回東海まつり
東海村ソフトボール連盟が発足
小泉民男さん(原研弓道部)が国体に出場
(昭和54年～59年)
- 昭和55年 村の木に「黒松」を制定
- 昭和56年 米国・アイダホフォールズ市と国際親善姉妹都市
を締結
県立東海高等学校ホッケー部が全国大会でベ
スト8に
- 昭和57年 第1回東海村クリーン作戦実施
- 昭和58年 第1回やったん祭
- 昭和59年 東海村シルバー人材センターが始動
- 昭和60年 『東海村史』編さん開始
村立図書館が開館
- 昭和61年 第1回東海村商工祭
村立弓道場が完成
- 昭和61年 石神コミュニティセンターを皮切りに、各地区
にコミュニティセンターを整備

スポーツ

〈ホッケー〉

昭和34年に、原研チームができたことが、東海村だけでなく茨城県のホッケーの始まりです。もともとは、東京ホッケー協会にあったホッケーチームが、東海村に日本原子力研究所ができたことをきっかけに、東海村に移転してきました。

昭和49年の国体では、東海村がホッケー会場となりました。国体開催前は、照沼小、白方小、中丸小にホッケーのスポーツ少年団があり、当時は200人近くのメンバーがいたそうですが、国体が終わると衰退していき、中丸小学校にしか少年団が残りませんでした。一方で、東海高校が全国大会でベスト8に入った時(昭和56年度)には、東海村出身の高橋義徳さんや永井東一さんのような、後に日本代表になる優秀な選手を輩出しました。

山梨県などの強豪と比較すると、東海村では、少年団でホッケーをしていても、中学校に行くと部活動がなく辞めてしまったり、中学校でやっても高校に部活動がなかったりと、連続・継続しなかったというのが1つの問題でした。しかし、東海南中学校にもホッケー部ができ(平成13年)、最近では女子ホッケー部もできました。徐々に連続的にホッケーと関わるような環境になってきているので、これからもっと成長していくのではないかと思います。

(茨城ホッケー協会事務局長・東海村ホッケー連盟事務局長 高橋忠織)



▲東海中学校全国大会出場記念のテレホンカード



〈ソフトボール〉

現在の株式会社ジェー・シー・オーに転勤してきた昭和50年代には、常会や学校区、地域のソフトボールチームが30チーム程度あり栄えていました。昭和51年からは、「茨城県お父さんソフトボール大会」があり、各市町村から代表チームが出場しました。既婚者であることが参加資格であり、特に船場が強かったです(昭和63年から3年連続で県大会優勝。昭和62年から21回連続県大会出場)。私は、平成元年頃に南台に引っ越し、南台の少年団のコーチを頼まれました。当時は子どもが多く、ソフトボール少年もたくさんいました。1週間で成長していく子どもたちの姿を見て、とてもやりがいを感じました。ソフトボールの魅力は、子どもから大人まで楽しめて、レベルに合わせた試合ができることです。ソフトボール人口が増えればうれしいです。

(茨城県ソフトボール協会普及委員長 前田孝通)

【村の記憶 大募集】

現在、「広報とうかい」では、昭和50年代～60年代の東海村の記憶や当時の写真を募集しています。ぜひ情報をお寄せください。情報は、電話またはメールで、下記の担当へご提供ください。

【問い合わせ】生涯学習課博物館・文化財担当(歴史と未来の交流館内) ☎287-0851 ✉ syougaiyakusyu@vill.tokai.ibaraki.jp